SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Let's 能プロジェクト

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子, 小嶋, 遼, 山﨑, 綾, 横関, 美咲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7214

Let's 能プロジェクト

音楽教育講座　小西潤子　小嶋遼　山﨑綾　横関美咲

1．事業概要

能は、小・中学校の教材としてもとりあげられている日本伝統芸能の１つであり、静岡県にもゆかりがある。しかし、一般には敷居が高く、観客の多くは中高年が占めている。こうしたことから、（財）静岡県文化財団（以下、財団と表記）は、これまでも若い世代への能楽普及のための自主事業やアウトリーチ活動を推進してきた。一方、教育学部は10年以上にわたって担当教員・小西を通じて、文化芸術事業実習としてこれらの活動に学生を参加させるなど、財団と連携・協力してきた。文化芸術事業実習では、昨年度に引き続いで充実した「事前指導」「事後指導」を財団側から提供された（写真１）。

本プロジェクトは、財団主催の「平成23年度伝統芸能普及プログラム」の一環として、財団から提案された。能楽普及のためのアウトリーチ活動を実習経験のある学生が主体となってアイデアを出して企画運営をするというものであった。能楽師は、能の普及活動を積極的に推進している。財団としては、能楽師との媒介役として交渉等を引き受けることで、将来的には大学や地域住民主体の事業へと転換するための足がかりとしたい。一方、大学側にとっては音楽科教員養成の専門教育において、学生たちが日本伝統音楽を間近で学ぶ貴重な機会となる。プロジェクトに加わる学生にとっては、企画運営のプロフェッショナルである財団から直接ノウハウを学ぶ機会になる。しかも、大学外でのアウトリーチ活動を行うことによって教員としてのスキルアップの機会となる。参加者すべてにメリットがもたらされると期待されたのである。

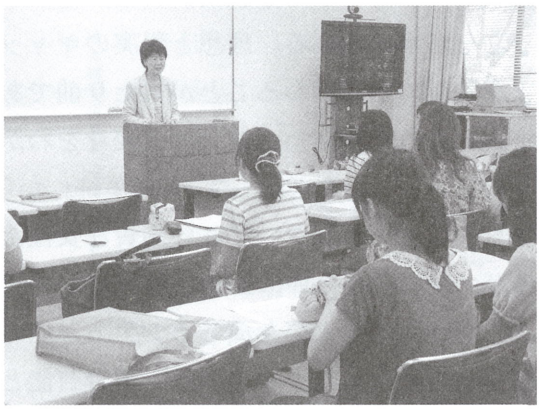

写真１　田村館長による実習事前指導

2011年5月13日第1回の会合を行い、プロジェクト・メンバーとして実習経験のある音楽文化専攻 4 年山﨑綾、横関美咲が参加することになった。メンバー自身もなじみがない能のアウトリーチ活動を行うことから、ともに主体的に学ぶことを意識して、プロジェクトの名称を「Let's 能」とした。以後、適宜財団スタッフにも加わってもらい、夏休みまで週 1~2 回以上のペースで会合をして企画を固めた。主な企画としては、高校と大学で能楽師を招いての実演付講演からなるイベントを行い、そこでの配布資料として小冊子を作成することにした。小冊子作成にあたり、写真やデザインを得意とする音楽文化専攻 4 年の小嶋遼がメンバーに加わった。そのほか財団主催の関連公演の広報をすることになった。

大学以外でのイベント実施先を高校としたのも、メンバーの提案によった。理由は、自

分たち大学生と近い年代であること、小中学校に比べて高校では能楽普及イベントの機会がないことによった。加えて、高校と大学にとっては高大連携事業となる。高校は生徒の大学進学意欲を高める効果を期待し、大学は地域での広報活動と位置付けられる。実施先を決定するにあたっては、東京から招聘する能楽師の当日の移動の便や音楽専任教員が配置されているかどうかなどの条件を考慮し、静岡県立静岡城北高校とした。夏休み後には音楽担当の渡辺裕教諭と打ち合わせを重ねて、高校側の現状とニーズを把握することにつとめた。また、双方の行事や時間割を考慮して日時を決定し、能の実演と収容生徒数に適した会場として体育館を設定した。対象は、1年生288人となった。

多くの能の演目は、「あの世」からのメッセージである。主人公は、この世で遂げられなかった思いを告げるために化身として現れるが、思いあまって修羅場で本性を現す。最後には鎮魂され、静かにあの世に戻っていくというのが典型的なストーリーである。長引く不況や少子高齢化の問題に直面する中で、大人たちの望みに応えて、若者は小さな世界で安定した生活を求める傾向にある。しかしながら、現実に対応するためには柔軟に変化することが求められる。理想と現実のギャップに悩む高校生や大学生に対して、人はさまざまな状況の中で変わることが当たり前であることを伝えることが、本企画の重要なメッセージとなると考えた。演目は、変身をわかりやすく示せることやイベントの季節にあったものであることを考慮して、「紅葉狩」からシーンを取り出すことにした。これは、この世のものとは思われない美しい高貴な女性たちに化けた鬼神が平維茂をだまして酒に酔わせるが、夢に現れた神に救われるというストーリーである。

能楽師は、主人公を演じるシテ方と能の音楽を担当する囃子方の中から笛方を選んで招聘することにした。高校では、舞台芸能としての能全体のイメージを伝えるために、シテ方からの話を中心にし、音楽を専攻する学生を対象とした大学での講演では、主に笛方から、楽譜にあたる「唱歌（しょうが）」や演奏方法について聞くことにした。能楽師の家に生まれ、若手として活躍する観世流シテ方・角幸二郎氏と、大学の教員養成課程で作曲を学び、一般人女性として能楽師になった一噌流笛方・八反田智子氏に講師を依頼した。角氏、八反田氏には、それぞれ事前に時間をとってもらい、メンバーが東京の観世能楽堂等で取材をした。担い手である能楽師への直接の聞き取り調査は、単なるイベント内容の打ち合わせにとどまらなかった。どのような心意気で舞台に臨み、どのようなプロセスを経て演目が観客の前に現れるのかといった能楽師の側からの能の一側面を知ることができ、彼らと高校生・大学生の間に立ってどのように橋渡しをするかを考えるための重要な機会となった。それ以上に、初めて訪れた能舞台は、メンバーにとって衝撃的であった。その場所には、「魂」が宿っているように感じられた。夢中になって小嶋が写真を撮った。

それからは、小冊子作りに力を入れていった。能の美学を伝えるために、すみずみまで考えてデザインしていった。表面的な美しさではなく、使い込まれた生々しさを美しく伝えたいと思った。表紙は能舞台とし、舞台裏から見た能舞台、能楽師のすり足、衣装の柄、扇、面、楽器とそれぞれ見開きで1つのテーマを取り上げた（写真1）。

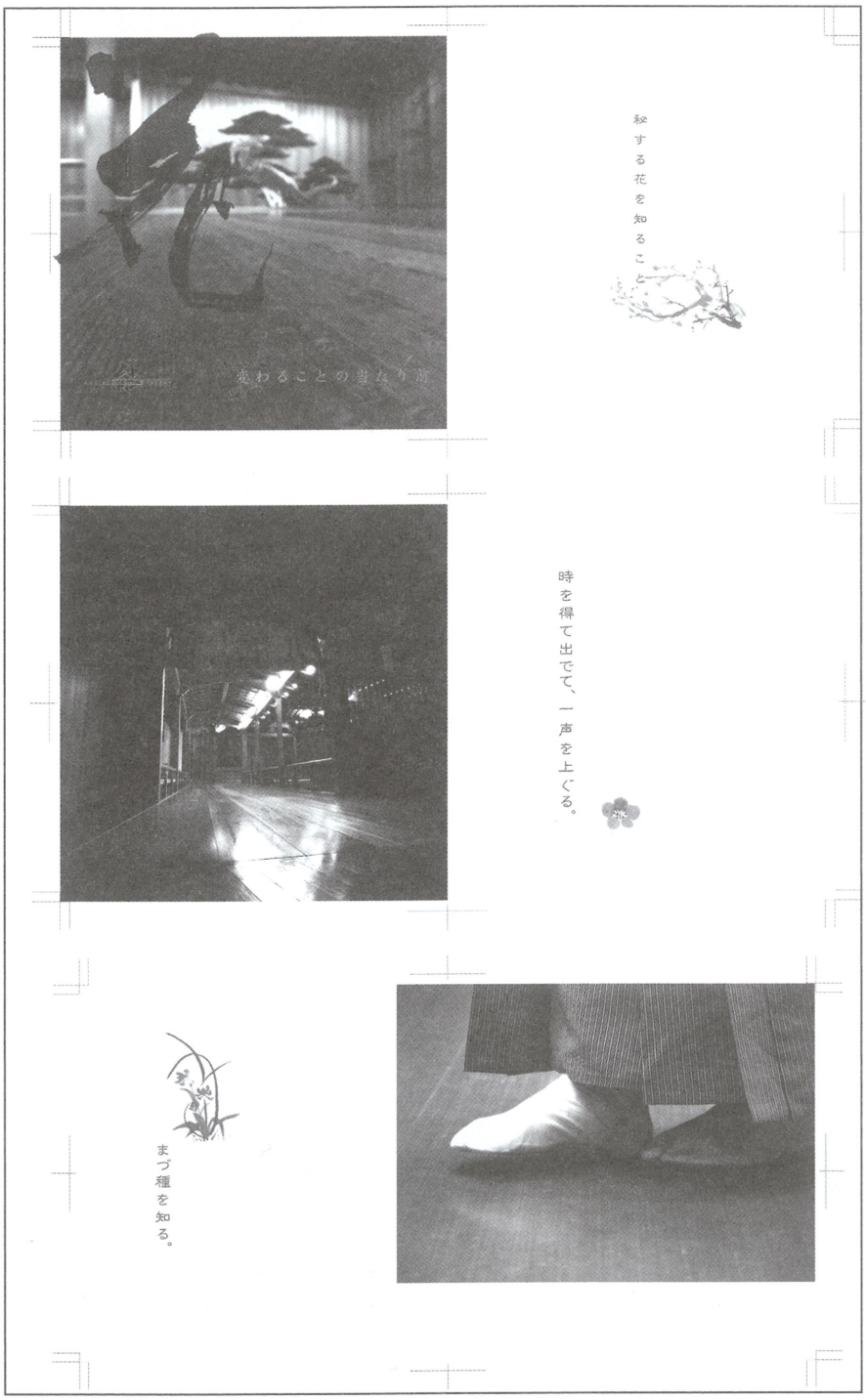

写真１　小冊子原稿より

能の美学を感じ取ってもらうために、文字による解説の代わりに世阿弥の『風姿花伝』のことばを編集した一節を載せるのみにした。想像力をかきたてることを意図してあえて白黒印刷とし、CD解説書サイズ、やや厚めの和柄風の紙を選んだ。高校生、大学生が手にとった瞬間に何かが伝わるようにしたかった。偶然のきっかけで、題字や花のイラストを書文化専攻の学生に依頼することができた。また、財団よりデザイナーの榊原幸弘氏を紹介してもらい、アドヴァイスしていただくことができた。イベント当日の運営は、予想以上に準備が必要であった。それぞれの役割と分担を考慮しながら、能楽師、財団スタッフ、プロジェクト・メンバーが静岡城北高校と静岡大学を移動する手配だけでも、細かい計画を立てる必要があった。2か所の会場設定も、メンバーだけでは不可能を依頼した。直前まで、司会進行の原稿を書いたり、出来上がった配布資料、財団の関連イベントチラシやアンケートをセットにしたりする作業などに追われることになった。

図１　当日配布資料

正直なところ、高校生がどのような反応をするのかは不安であった。通常の鑑賞教室のように挨拶から始めるのではなく、生徒たちが体育館に着席して落ち着いたところで、突然笛が鳴り響くことから始めることにこだわった。西洋音楽のように、始まりと終わりが区切られていない能の世界そのものを見せたいと考えたからである。

写真２　角幸二郎氏の指導

写真３　八反田智子氏の指導

結局、マイクは準備できなかったのだが、体育館の床と天井を伝わる音と振動は相当のものであった。ぴんと張り詰めた空気の中で、たった二人の能楽師の生の音が、生徒たちの身体に直接響いたのであった。

大学での講演も、参加した学生に刺激を与えた。生の音に圧倒されたことで、自らが子どもたちに教える立場になるのに、あまりにも本物を知らないことを自覚する機会となった。彼らの体験が受け身にとどまらざるを得なかったのに対して、プロジェクト・メンバーは言葉では言い尽くせないほどのものを得たはずである。それが具体的にどういうものであるのか、まだ本人たちにはわからないかも知れない。しかし、彼らが次の世代を養成するときに、大きな力となると信じている（小西）。

2．小冊子作りを通して

お能について知らないのに、お能を紹介する小冊子を作る。知らないからこそ、見えるものがある。はじめの打ち合わせで方針を確認したとき、私には不安しかなかった。言っていることは分かるし、できるかもしれないが、確証は何一つ無く、ましてや取材から全てをやるとなれば、お能という一つの専門分野に身一つで飛び込んでいかなければならない、それは恐怖でもあった。アニメの走馬灯のようだが、頭の中には「こんなことも知らないの？」だとか「何言ってんだこいつ」だとか、そういう台詞ばかりがよぎった。しかし、同時にやってやるという野心みたいなものもあった。自分語りになるが、大学四年間で、地道に積みあげるのではなく、そこに存在する感覚を、如何に掴みとることができるか、ということを常に意識して生活してきた、その、感覚を研ぎ澄まして感じ取る能力を、試されているような気がした。だからやらなければならないと思った。

全てを用意する必要があった。これまで手がけたポスターやチラシなどには元々素材があって、それを上手く組み合わせ、配置してゆくのが主な作業だったのに対し、今回は何一つなかった。例えば表紙にインパクトを持たせたいという漠然としたイメージだけがあって、何を表紙に持ってこなければならないのかがわからないし検討もつかない。お能なんて知らないから、能面を持ってきたら変なのかもしれない、装束の柄…だと他にもっとやりようがあったのではと突っ込まれるのかも知れない、が、いいのかも知れない…、分からない。構成の打ち合わせをした時点で、完成品の想像が全くもってつかない。怖かった。真っ暗闇にいて、しかし闇雲に走らなければならない様なものだった。

しかしその恐怖はすごい勢いで解消されることとなった。全ては、能楽堂の撮影を行った時のことだった。例によって、何を撮ったらいいのか分からない状態で踏み入れた能楽堂だったのだが、客席に入った瞬間、とにかく撮っていた。ここはこのレンズを使わないと、こっちの角度から、ああ、この場所から撮らないと「いけない」。そう思った。本物の能楽堂は、見たら分かったのだった。そこに存在する感覚に、掴みかかるだけでよかったのだ。舞台の袖、幕を上げて舞台上を覗き込んだ時、世界が広がるように感じた。お能がお能になる瞬間を感じて、とにかく撮った。今思えばシテ方の先生に「幕を上げていても

らえますか」など大変失礼なお願いも平気でしてしまっていた。舞台の床は度重なる公演でボコボコに凹んでいた。それを撮りながら、ファインダー越しに松羽目が見えた時、床の醜さと美しさの間にお能がある気がして、掴みかかった。こうして、恐怖は消え、気づいたら素材も揃ってしまった。

素材と一緒に、私の感覚も十分に揃ったので、想像がつかなかった完成品が一気に目の前に現れたように思った。むしろページが足りなかった。２枚の写真で表したいことを、１枚で表現するにはどうしたらいいのか、とにかく濃度をあげなければならなかった。あとは、勝手にできてしまった。

はじめに何も知らなかったからこそ、新たにつくりだすことができる。どこを向いたらいいかわからないからこそ、価値にとらわれず平等に見ることができる。このパンフレットはもう、今の私には作れない、そう思うと、どうにもにやけてしまうのだった（小嶋）。

３．学んだこと

今回のプロジェクトは本来の大学のカリキュラムにはなく、３年時の文化事業実習の延長として(財)静岡県文化財団からお話をいただき、少人数による完全な有志での活動であった。そのため、他の学業や実習、就職活動との両立や、チーム内の分担や仕事の進め方に悩むことも多かった。しかしその分、通常の授業では絶対に得ることのできない貴重な経験となった。

3-1　文化事業運営の実践的理解

３年時の実習で、文化施設の自主事業の運営を間近で見て、アーツマネジメントの必要性を実感するとともに、その難しさを知ることができた。しかし実習といっても、言われた仕事を手伝わせて頂くことが主であるため、自ら考え行動する力を鍛えるまでには至らなかったと思う。今回は、扱う題材の勉強、テーマや講師決め、能楽師や高校との交渉、タイムスケジュールや台本作り等、文化財団の方や教授のアドバイス、沢山のフォローをいただきながらではあるが、学生主体で活動することができた。本来のカリキュラムでは３年時の実習のみであるが、今後の学生も実習とセットで少しでも実践的な活動ができると良いと思う。

活動の中で一番感じたのは、様々な物事を「つなげる」ことの大切さであった。文化施設のは沢山の自主事業や貸し館事業があるが、ただ場所を貸すだけでは観客を集めるのには限界があり、良さを伝えるのも難しいと思う。アーティストの思いを私たちコーディネーターが理解する、また地域性や対象者の興味を求められるものを理解して、それらを上手くつなげていかなければならない。

3-2　自分自身の能楽の学び

「自分が面白いと思わないものを見せて、お客様が満足することはない。」という文化財団の方のお話が非常に印象に残っている。プロジェクトを始めた時点で、私にはまだ能楽に関する知識はほとんどなかった。高校生、大学生に伝えたい内容を必死考える中で、企

画運営の勉強以上に、純粋に自分が能楽に興味を持ち、視野を広げることができた。今回はたまたま能楽であったが、誰かに物事を伝えようとすると、まず自分自身がそれを深く勉強することができる。特にこれから教師になる学生には、一度は本物の舞台を観て、日本の美しい文化に感動し「面白い」と思って子供たちに能楽を教え、そしてプロの舞台を少しでも生で見られるように働きかけて欲しいと思う（山﨑）。

4．教育現場で活かしたい

今回私は、静岡県文化財団と静岡大学教育学部の学生との連携による伝統芸能普及プロジェクトという初めての試みに、企画・運営という立場で参加してきた。小西教授と財団職員の方とイベントの企画に向けて週 1 回程度重ねたディスカッション、能楽師との打ち合わせ、静岡城北高校・静岡大学でのイベント、という活動を通して、さまざまなことを学び感じた。

このプロジェクトが発足し、まずは主体となる自分たちが能に対して理解を深めることから始まった。ディスカッションの中では、小西先生と財団職員の方を通じて、能がどのような芸能でその背景にあるものは何か、能楽師の精神性や生き方などについて学び、自分たちが感じる能の魅力やイメージを固めていった。それを踏まえて、どのような人々を対象に能を通して何を伝えたいのかというメッセージを、「変わることの当たり前」とし、イベントの企画の方向性を決めた。ディスカッションの場では、普段接する機会のない財団の方から直接お話しを聞くことができ、話し合いの中で新しい視点が生まれ広がっていった。能の背景にある「あの世」、「幽玄」という世界観は、現代社会を生きる我々には想像もつかないものがあり、実際に能楽師の方と仕事をされている現場のお話を聞くことは、イベントの内容を考える上で大変参考になり、ディスカッションの場そのものが有意義な時間であったと感じている。

「変わることの当たり前」というメッセージに基づき、静岡城北高校 1 年生を対象としたワークショップ、静岡大学教育学部音楽科での出張講義を企画・運営した。パンフレットの作成から財団職員の方との打ち合わせ、当日の司会進行など、学生の我々にとってはすべてが初めての経験であり、細かい部分まで意識を行き届かせることがまだまだできていなかったことを痛感した。足りない部分を小西先生や財団の方々に補っていただきながら、イベント当日を迎えることができた。当日は、主催者であると同時に、本物の能の世界観を全身で感じることができた、たいへん貴重な機会となった。これまで能に関する話し合いの中で様々に思いをめぐらせ、理解を深めてきたつもりではあったが、実際に本物を目の当たりにすることがいかに力を持つか、自分自身が一番強く感じていた。

「能」という伝統芸能を通じて、普段出会うことのできない方々と知り合い、その人の考えや人生観に触れることで自分自身の考え方も深まっていった。実際に現場で動きながら学んでいく中で、難しさも感動も授業だけでは学べないことをたくさん学べたと思う。今回の人との出会いや経験したことは、これから教育現場に立った時に必ず自分自身の糧

にしていきたいと思う（横関)。

【参考　アンケートより】

◎　城北高校

☆今回のプログラムについて

大変良かった、又は良かった ‥‥９０．８％（生徒）

‥‥１００％　（先生）

☆今後もこのようなプログラムに参加したいか

是非参加したい、又は参加したい ‥‥８９．９％（生徒）

☆先生方の感想

・生徒が集中して真剣に見ていた

・ 学校内の人材だけでは限界があるし、大変新鮮な風を感じた

◎　静岡大学学生

☆今回のプログラムについて

とても楽しかった、又は楽しかった ‥‥１００％

☆今後もこのような公演を行ってほしいか

是非行ってほしい、又は行ってほしい ‥‥１００％

☆今まで能楽の公演を見に行ったことがあるか

見に行ったことがない学生‥‥８９％

その中で、これから見に行きたい学生 ‥‥４１％